

植調協会だより

◎ 会議日程のお知らせ

・平成 24 年度冬作関係(麦類・いぐさ・水稲
刈跡)除草剤・生育調節剤試験成績中央検討会
日時:平成 25 年 9 月 12 日(木)10:00~17:00

場所:浅草ビューホテル

〒111-8765
東京都台東区西浅草 3-17-1
TEL 03-3847-1111

編集後記

夏は毒グモの被害が増える季節でもある。「毒グモ騒動の真実」(全国農村教育協会、2012 年)に記載されている日本での毒グモ咬傷事例 49 件のうち、8~9 月に発生したものが 27 件である。毒グモが熱帯・亜熱帯を中心に分布していることから、気候条件という要因が考えられるが、咬傷事例の多くが庭などに下りる際に履こうとしたサンダルに付いていた毒グモによることから、裸足でつかけるというのはかなり危険である。

わが国で毒グモと呼ばれるクモは、最も多いのがセアカゴケグモ、次いでハイイロゴケグモ、さらに 3 種を加えた 5 種で、いずれも外来生物である。毒グモと聞くと多くの日本人はタランチュラのような大型のクモを想起するようであるが、これには毒はない。毒グモはいずれも比較的小さいクモで、セアカゴケグモでは成熟したメスの体長が 7~10mm、球形の腹部の背面中央に赤色のよく目立つ帯がある。日本ではすべて戸外で発見され、少し湿った側溝、排水溝の蓋の裏側、庭や花壇のコンクリートブロックの隙間、建物の隅や窪み、墓石の間、フラワーポット、

プランター、植木鉢の下、地表近くの固い人工物の隙間などに巣を作り、木や草にはつかない。

毒グモがどのくらい危険な生物であるかについては、1995 年の初発見以来、「死の危険あり」から「おとなしいので安全」まで、両極端の情報に踊らされ、正しい実態がなかなか伝えられてこなかったが、「かなり危険だが、オオスズメバチほどではない」といったあたりであろう。また、咬傷例の増加とともに重症になる可能性があるといわれ、さらにアナフィラキシーショックによる死亡例も世界では報告されている。

ともあれ、毒グモは侵入からの 18 年間で分布を広げ、咬傷被害も増えている。日本での毒グモ騒ぎには、加速度的に増加する外来生物、クモ類に対する悪印象、熱しやすく冷めやすいマスコミなど、日本特有の問題が凝縮されていると見る識者の見解は注目されるべきであろう。

毒グモ被害の回避には、野外作業では軍手を着用するなど、咬まれないことが第一で、まだまだ続く猛暑の日々、十分に注意したい。

公益財団法人日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東 1 丁目 26 番 6 号
電話 (03) 3832-4188 (代)
FAX (03) 3833-1807
<http://www.japr.or.jp/>

編集人 日本植物調節剤研究協会 理事長 小川 奎
発行人 植調編集印刷事務所 元村 廣司

東京都台東区台東 1-26-6 全国農村教育協会
発行所 植調編集印刷事務所
電話 (03) 3833-1821 (代)
FAX (03) 3833-1665

平成 25 年 8 月発行定価 525 円(本体 500 円+消費税 25 円)
植調第 47 巻第 5 号 (送料 270 円)

印刷所 (株)ネットワン